

# 鳳機関

## ——アジア太平洋戦争期のティモール島における諜報活動

高橋茂人 (大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター)

キーワード：ティモール島、海軍系諜報機関、  
日本学校、戦時動員

### はじめに

アジア太平洋戦争期に活動していた日本軍の諜報機関として、ビルマ戦線の南機関やイギリス領マラヤの藤原機関、対インド工作に従事した岩畔機関や光機関、ジャワの参謀部別班など主に陸軍系の諜報機関が広く知られている<sup>(1)</sup>。しかし、海軍系諜報機関についてはこれまであまり取り上げられることがなかった。

民間人で構成されていた海軍系諜報機関のひとつとして、鳳機関がティモール島を中心に活動していた。その活動地域の中心は、初期にはティモール島、後にオランダ領東インド（現在のインドネシア）東部地域に移動した。鳳機関はアジア太平洋戦争期のティモールに関する文献の中で、これまで断片的に取り上げられてきた。たとえば、東ティモールの通史を著したガン Gunn は、*Timor Loro Sae: 500 years*（ティモールロロサエ<sup>(2)</sup>：500年）で「憲兵隊と関係していた鳳という名の機関の極悪無法な活動<sup>(3)</sup>」と述べている。また、ポルトガル語の文献では、戦時中ポルトガル政庁で働いていたサン

タ José Duarte Santa が、鳳機関に連行された者は厳しい尋問を受けたと述べている<sup>(4)</sup>。しかし、どちらもそれ以上に詳しい記述はなく、鳳機関の組織や活動について実態を明らかにするような実証的研究は未だ見当たらない。

本稿では、この鳳機関について、その設立過程や機構、活動を考察する。

本論に入る前に、ティモール島の歴史についてごく簡単に確認しておく。白檀の島として知られたティモール島は1859年4月のリスボン条約により、西部がオランダ領、東部がポルトガル領に分割された。東部には約46の王国が、西部には約16の王国が存在していた。ポルトガルは1702年に最初のティモール総督を任命したが、内陸部まで実効支配するようになったのは、19世紀終わりから20世紀初頭にかけての植民地「平定」戦争以降であった。ヨーロッパで第2次世界大戦が勃発すると、ポルトガルは中立を宣言した。

しかし、1941年12月17日、オーストラリア軍とオランダ領東インド王国陸軍 KNIL の計約500人が、ポルトガル領ティモールの首都ディリに侵攻した。開戦後、防衛能力の弱いこの地が日本軍に攻撃され、オーストラリア侵攻の基地となることを恐れた「先制」占領であった。これに対し、カルヴァーリョ Manuel de Abreu Ferreira

(1) Joyce C. Lebra, *Japanese-trained armies in Southeast Asia: independence and volunteer forces in World War II*, Heinemann Educational Books (Asia), 1977 (村田克己ほか訳『東南アジアの解放と日本の遺産』秀英書房、1981年)、泉谷達郎『ビルマ独立秘史: その名は南機関』(徳間書店、1967年)、藤原岩市『藤原機関: インド独立の母』(原書房、1970年)、中野校友会編『陸軍中野学校』(中野校友会、1978年)など。

(2) ロロサエは東ティモールの公用語であるテトゥン語で Loro が「太陽」を、Sae が「昇る」の意から、「東」を表す。

(3) Geoffrey C. Gunn, *Timor Loro Sae: 500 years*, Livros do Oriente, 1999, p.236.

(4) José Duarte Santa, *Australianos e Japoneses em Timor na II Guerra Mundial 1941-1945*, Editorial Notícias, 1997, p.92.

de Carvalho 総督は中立侵害として直ちに抗議したが、脆弱なポルトガル植民地軍部隊では実力でこれを排除することはできず、豪軍・蘭印軍は首都デリに駐留し続けた。そのため、カルヴァーリョ総督は、連合国軍との争いを避けるため、植民地軍を山間部のマウビシに移駐させた。

翌1942年2月20日、日本軍（1個連隊基幹）はオランダ領のクーバンとポルトガル領のデリに同時侵攻し、占領を開始した。当初の攻撃目標はクーバンのみであったが、日本軍は、豪・蘭印軍の駐留によりポルトガルの中立は崩れたと認識したこと、クーバン攻略にあたって背後となるデリに豪・蘭印軍が存在していることは危険だと判断したこと、直前になってデリも攻撃目標に加えられた。日本軍の侵攻により、ポルトガル領では豪・蘭印軍が山岳地に後退し、日本軍に対してゲリラ戦を展開した。

しかし、日本軍の占領地域が拡大し、ほぼ全域をその支配下に置いたことにより、豪・蘭印軍はゲリラ戦を継続することができなくなり、1942年末から1943年1月にかけてオーストラリアへ撤退した。その後、連合国軍は、極めて少人数の諜報部隊 Service Reconnaissance Department がティモール島で活動を行うほか、オーストラリア本土からの空軍機が主要な地域に空爆を実施した。そのため、首都デリはほとんど廃墟と化した<sup>(5)</sup>。

## I. 創設者清国重利

鳳機関の創設者である清国重利は、1908年（明治41年）4月20日、父重太郎、母すゑの長男として福岡県田川後藤寺に生れ、大分県中

津市で成長した。重太郎は三井筑豊炭田の炭鉱部員であった<sup>(6)</sup>。村辺繁一（元黒龍江省付秘書官、第3方面軍総司令部顧問）は、重太郎のことを、頭山満や末永節、進藤武左衛門、伊藤伝衛門、中島徳松、中野正剛、緒方竹虎などと親交があり、宮崎滔天のよき理解者であったと述べている<sup>(7)</sup>。重利は、1925（大正14）年に中津中学校を卒業するとすぐに陸軍士官学校に入学し、北京大学に留学した。奉天やハルビンの特務機関にも所属し、満州事変前には「清鳳洋」と中国名を名乗っていた。この時は、ハルビンに家を持ち、満洲で馬賊の頭目として活動を行っていた。平山蘆江によれば、清国の中国名は最初「清鳳洋」であったが、1934年5月15日、馬賊討伐のため小合隆に赴いた清国は、4歳の幼女を過失で斬殺してしまった。そのことを記憶するために、幼女の名である鳳花から一字を取り、風にかえて、清鳳洋と名乗りはじめたと記している<sup>(8)</sup>。清国はまた、馬占山と親しく、湯玉麟にも面識があったという。東三省政府主席の張学良や趙欣伯奉天市長の秘書官などを勤めていた時期もあったようである<sup>(9)</sup>。満洲国建国後は満洲国総務庁の役人になった<sup>(10)</sup>。

一方で清国は、「尊皇塾」という名の私塾を神奈川県の鎌倉材木座に開設した。正確な開設時期は不明だが、1936年の2・26事件以降と思われる。「尊皇塾」という名に表れているように、絶対的な天皇崇拜と滅私奉公的な天皇への献身を塾則として定めていた。塾生は寄宿生と通学生の両方から構成されていた<sup>(11)</sup>。

日中戦争が勃発すると、清国自身は活動の中心を中国大陆に移した。1939年12月、広東で「中

(5) 後藤乾一『〈東〉ティモール国際関係史：1900－1945』みすず書房、1999年、7～27ページ；Gunn、前掲書；日本占領期史料フォーラム編『日本軍占領下の東ティモール視察復命書：日本・ポルトガル両国当事者の記録』龍溪書舎、2005年、34ページ。

(6) 「清国重利履歴書」；平山蘆江「馬賊清鳳洋（3） 馬賊の仇討」『中央公論』1937年6月号、496～497ページ；平山蘆江「馬賊清鳳洋（4） 仇討の前夜」『中央公論』1937年7月号、339ページ。

(7) 村辺繁一「内閣調査室誕生秘話及び清国重利氏について」（清国重利『秘録戦後史：内閣調査室への報告書でつづる』第1巻、学陽書房、1978年、所収）、12～14ページ。

(8) 平山、前掲「馬賊清鳳洋（3） 馬賊の仇討」496ページ。

(9) 平山蘆江「馬賊清鳳洋（2） 誓文六始祖」『中央公論』1937年5月号、432～448ページ。

(10) 平山、前掲「馬賊清鳳洋（3） 馬賊の仇討」485～501ページ。

(11) National Archives of Australia（以下、NAAと略）：MP742/1 336/1/1724, “Statement by Abe, Tadaichi.”

華民国和平救国軍」を設立し、司令官には前広東治安維持会副会長の呂春榮<sup>(12)</sup>、副司令官には「鳳清祥少将」と名乗った清国が就任した。兵士は汪兆銘の「和平救国」スローガンに呼応した「帰順兵」から構成された<sup>(13)</sup>。

アジア太平洋戦争開戦直前には、清国は二つの偽名のパスポートを所持していた。一つは外務省外交伝書使として「北野藤夫」名義の公用旅券（1941年4月、外務大臣近衛文麿発行）であり、もう一つは「鳳歳歳」名義のパスポート（1941年10月、外務大臣東郷茂徳発行）で、これはタイとフランス領インドシナ（仏印）での「飼料買付ノタメ」と記されていた<sup>(14)</sup>。この時期の清国の所属は明らかとなっていないが、これほどの短期間に二つの偽名パスポートを所持していたこと、外交伝書使という職種、タイや仏印という地域への関与などから総合すると、この時点ですでに諜報活動に携わっていたことが強く示唆される。

また、清国自身の回想によれば、呂春榮中将与行動を共にしていた1939年末頃に、第21軍参謀副長の佐藤賢了から招請され、参謀長の根本博少将との面会を経て、タイ・シンガポール・マレー半島へ派遣されたという<sup>(15)</sup>。そして、1941年末に鳳機関を組織することになった。

戦後は、「東亜総合政治研究所」を設立し、アメリカ極東空軍の客員を勤め対中・対ソ情報

網の整備を進めていたという。1952年、総理府内閣調査室の設立とともに、その客員スタッフ（事務委託）となった。そのほか、東京オリンピック委員（1964年）、日本PTA全国協議会会長（3期、1964 - 1968年）、日本万国博覧会理事（大阪1970年）などを歴任した<sup>(16)</sup>。辰巳栄一中将<sup>(17)</sup>、高嶋辰彦少将<sup>(18)</sup>、福留繁海軍中將<sup>(19)</sup>などと交友関係を持っていた。武術に長けており、柔道は5段、剣道が4段だった。また、日蓮宗権僧正を名乗っていた。

地元田川では、戦後、和服を着てステッキについて歩いている姿が見られ、「満州での大物」「満州ゴロ」と恐れられていた<sup>(20)</sup>。

## Ⅱ. 鳳機関の設立

日本海軍中央における情報機関は、海軍省翻訳課にその緒をみることができる。海軍省翻訳課は、明治5年、兵部省の廃止と陸軍省・海軍省の設置に伴い、明治9年海軍省達丙第3号「本省3課6局及び諸庁之事務章程」により新設された。その後、海軍中央の情報機構は変遷を遂げるが、軍令部第3部第8課が昭和12年2月に設立され（軍令部機密第36軍令部服務規程改正）、アジア太平洋戦争開戦前の情報活動を担当した<sup>(21)</sup>。

このように、情報の収集・分析は、平時には

(12) 中華民国維新政府の広東治安維持会副会長兼治安処処長（1938年12月10日 - 21日）、広東省政府副首席（1938年12月21日 - 1940年4月21日）、南京国民政府（汪兆銘政権）軍事参議院参議（1940年9月27日 - ）。『中華民国時期軍政職官誌』甘肅人民出版社、1990年、1900、1953ページ。

(13) 「覆面脱げば日本人：和平救国軍副司令鳳將軍帰朝」『大阪毎日新聞』1940年1月9日、「大陸建設に輝く功績：鳳清祥副司令官帰る」『福岡日日新聞』1940年1月9日（夕刊）。

(14) 「戦後日本の知られざる裏面史」『週刊ポスト』1978年6月16日号、20 - 21ページ。同記事については、江波戸哲夫氏からご教示頂きました。ここに記して感謝いたします。

(15) 清国重利『秘録戦後史：内閣調査室への報告書でつづる』第1巻、学陽書房、1978年、26ページ。

(16) 清国、同上書、略歴；「戦後日本の知られざる裏面史」、前掲、20ページ；「清国重利履歴書」。

(17) 1895年 - 1988年、佐賀。第3師団長、東部軍参謀長、偕行社会長。

(18) 1897年 - 1978年、福井。皇戦会常務理事、台湾歩兵第1連隊長、第16軍参謀長、東部軍参謀副長、第12方面軍参謀長。

(19) 1891年 - 1971年、鳥取。連合艦隊参謀長、軍令部第1部長、第10方面艦隊兼第13航空艦隊兼第1南遣艦隊長官、戦犯拘留（シンガポールで禁固3年判決）、水交会理事長。

(20) 林えいだい氏による福岡県田川市での聞き取り（2009年6月16日付筆者宛書簡）。林氏には聞き取り・資料提供などを頂きました。ここに記して感謝いたします。

(21) 有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』近代文藝社、1994年、227 - 279ページ、秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、512 - 513、524ページ。

表 1 鳳機関主要幹部

氏名	学歴	前職	所属・備考
佐藤 靖	明治大学法科	東京市役所吏務課勤労報告会 掛長 (1941年)	尊皇塾、市政研究会常務理事、共産党転向 者
山本章甫	東京帝大建築科	東京市役所建築部 技手 (1942年)	尊皇塾、スメラ塾、市政青年連盟、市政研 究会役員、防空研究会
浜野啓一	東京帝大建築科	公衆衛生院 技手	尊皇塾、防空研究会
浪花 孟	早稲田専門学校法科	東京市役所国民精神総動員部 第1課 雇 (1940年)	尊皇塾、スメラ塾、市政青年連盟、市政研 究会役員、南機関員 (海軍側)
石川尚市	立命館大学法科	東京市役所監査部	スメラ塾、皇戦会、市政青年連盟、市政研 究会、防空研究会、興亜青年連盟協会、南 機関員 (海軍側、泰国班チェンマイ支部)
小村 勝	慶応義塾大学理財科	東京市役所社会局	尊皇塾、スメラ塾、市政青年連盟、市政研 究会
増田順亮	中央大学法科		尊皇塾、スメラ塾、市政青年連盟、市政研 究会役員、防空研究会
廣瀬善夫	日本大学	東京市役所水道局企画科	
潮崎 巖	和歌山高等商業学校		
楯又八郎	東京農大拓殖科		

出典：防衛省防衛研究所図書館史料室：①／日誌回想／51、石川尚市「錦隊（元鳳隊）回想録」昭和37年10月22日を基に、皆川真希「東京都政形成史研究序説：東京市役所内「市政研究会グループ」の活動を中心に」『人文学報』2004年、69-126ページ；山本政義『ビルマ工作と謀略将校』六興出版、1978年；『東京市職員録』（昭和14年－17年）で補足・確認した。

主に軍令部第3部において行なわれ、戦時にはこれに加えて軍令部に付属する特務班ならびに各作戦部隊に属する情報部が担当した。軍令部第3部は第5課～第8課から構成され、各課の担当は第5課が南北アメリカ、第6課が中国・満州、第7課がソ連とヨーロッパ(除イギリス)、第8課がイギリスとアジア太平洋地域を担当していた。軍令部第3部の部長には少将が充てられ、各課は平時には佐官クラスの将校数名が割り当てられていた。軍令部第3部では、外国の新聞雑誌やラジオ放送、在外武官報告、視察員の報告、捕虜の陳述や押収文書、作戦部隊の情報、外務省・陸軍省との情報交換などによる情報を収集・分析していた。また、特務班では無線電信の傍受、暗号解読などを行った。各課では担当国の国情調査ならびに兵要地誌類の収集・分析が行なわれた<sup>(22)</sup>。

鳳機関は1941年12月頃、軍令部第3部第8課の下に設立された。清国が伏見博英大尉に接

触し、設立を働きかけたと思われる<sup>(23)</sup>。機関員の採用は少なくとも二つのルートで行われた。すなわち、清国が主宰していた尊王塾と柔道の講道館である。

### 尊皇塾

清国が主宰していた尊皇塾が機関員採用の場になったのはしごく当然であろう。表1に掲げた幹部の所属団体を見ても、ほとんど全員が尊皇塾に関係していた。

尊皇塾による機関員採用の具体例は、阿部唯一に対するオーストラリア軍の尋問調書に記されている。開戦前の1941年8月、阿部は親友の小村勝を通じて清国に紹介された。この際に、国内政治や世界情勢などについて長時間語り合った。しかし、その後清国と関係することはなかった。アジア太平洋戦争開戦直後の1942年1月、小村が海軍軍属として南方に立ったことを阿部は知った。しかし、目的地や活動内容、

(22) 西嶋コレクション(早稲田大学アジア太平洋研究センター所蔵) Mic27-1、「海軍秘密謀報機関及海軍警察機関に就て」昭和22年6月5日提出。

(23) NAA: MP742/1 336/1/1724, "Statement by Abe, Tadaichi."



経緯などは不明であった。しばらくすると、阿部は小村から一通の手紙を受け取った。阿部も南方に来るように勧誘する内容であった。この手紙を契機に、阿部は日本に帰国中の清国と面会した。親友の小村が尊敬している清国からの激励を受けたこともあり、1年間の予定で海軍軍属として南方へ出発することを決心した。赴任地のクーバンに到着してはじめて、清国が諜報機関の責任者であることを知った<sup>(24)</sup>。

尊皇塾からの機関員は後述するように、1942年1月8日と5月の少なくとも2回にわたって、派遣されている。

### 講道館

奥田真輔の回想<sup>(25)</sup>によれば、オーストラリア方面の諜報活動を強化するために、柔道家の中から「特務機関員」を徴募することになった。1942年3月、伏見博英海軍大尉<sup>(26)</sup>が責任者となって、赤坂の百畳敷道場（土道館道場）で3段以上の柔道家から優秀な人材を機関員として選抜した。1942年1月に講道館5段に昇進していた奥田は、伏見大尉から厚い信頼を受けていたこともあり、機関員の選考を補佐した。機関員選抜後、教育訓練を実施して編成を完了した。1942年4月、機関員たちは東京駅を出発した。呉軍港での乗船待機中、米軍ドゥーリトル隊の本土空襲のため、出港地が急遽佐世保に変更となった。

### その他の関係機関

鳳機関の機関員になる以前、主要幹部の多く

が東京市役所に勤務しており、市政研究会に所属していたことから、東京市役所もしくは市政研究会のつながりを通じた機関員の採用が行われた可能性がある。

市政研究会は「市政の刷新発展に資する為、諸般の調査研究を行ひ併せて会員の人格の陶冶を図る」ことを目的に、1935年9月14日に結成された。東京市の吏員から構成されており、その活動は、①雑誌『市政研究』の発行（隔月）、②講演会<sup>(27)</sup>・談話会その他の集会、③評議員会において適当と認めた事業、などであった。会長は市長、顧問は助役・収入役ほか局長クラス、評議員は秘書課長・職員課長などで、「実践部隊として理事がおかれ、理事のなかからさらに中心的な活動家である常務理事が選出された」。1936年7月には会員は3,033人を数えた<sup>(28)</sup>。

また、主要幹部のほとんどはスメラ塾にも関わっていた。スメラ塾は1940（昭和15）年5月17日、末次信正海軍大將を塾頭として、大島浩・白鳥敏夫・石原広一郎・津田信吾・小島威彦らによって開設された。「日本を中心とするスメラ世界を建設するため、忠誠な指導的戦士を養成する」ことを活動の目的としていた。政治・経済・文化・日本史・哲学などの講義を行ったほか、講習会や「スメラ文庫」の発行を通じて塾生たちに教育を行った<sup>(29)</sup>。第1期講座は1940年6月17日から7月16日にかけて700余名が参加し、その後第2期（1940年10月14日－11月26日、2,000名）、第3期（1941年1月20日－2月20日、2,000名）、第4期（1942年4月28日－5月25日、2,000名）と続いた<sup>(30)</sup>。

(24) NAA: MP742/1 336/1/1724, “Statement by Abe, Tadaichi.” 阿部の供述はオーストラリア軍が作成した日本の諜報機関に関する報告書「The Japanese Secret Intelligence Services, Part 1-2 日本諜報機関の全貌：オーストラリア陸軍参謀本部の分析」の小スンダ諸島における活動詳細の基礎となっている。山本武利編『第2次世界大戦期日本の諜報機関分析：第1巻（解説／総論1）』、柏書房、2000年、242～246ページ参照。

(25) 奥田真輔「一期一会」未刊行回想録。奥田は1913年、小樽生まれ。早稲田実業、昭和8年20歳で講道館に入門。昭和19年3月現地除隊、台湾銀行行員に移籍。昭和21年6月1日、和歌山県田辺港で復員。奥田真輔氏の未刊行回想録は、奥田久幸氏のご好意で提供を頂きました。ここに記して感謝いたします。

(26) 1912年－1943年。海軍兵学校62期卒。海軍元帥伏見博恭の四男。1943年8月21日セレベス島ポマラ付近上空にて戦死。

(27) 第2回総合定例研究会（1942年9月12日）では、大川周明の講演「東亜共栄圏の理念に就て」が行なわれた。

(28) 源川真希「東京都政形成史研究序説：東京市役所内「市政研究会グループ」の活動を中心に」『人文学報』第346号、2004年、72-73ページ。

(29) 公安調査庁『戦前における右翼団体の状況（中巻）』1964年、507ページ。

(30) 昆野伸幸『近代日本の国体論：〈皇国史観〉再考』ベリかん社、2008年、232ページ。

幹部のうち二人（浪花孟と石川尚市）が南機関に参与していたことも興味深い。南機関は鈴木敬司陸軍大佐を機関長として1941年2月1日に設立され、ビルマ独立支援を任務とした諜報機関であった。鈴木大佐と陸軍中央との対立から、1942年7月末には自然消滅した<sup>(31)</sup>。南機関はビルマ人志士約50名を海南島に集め訓練したが、基地の設定や給養は海軍の、訓練は陸軍の担当と分担された<sup>(32)</sup>。ビルマ独立支援と日本の国益の関係について鈴木機関長から教え込まれていた「機関員の多くが、自信をもって活動にあたり、さらにビルマ民族運動の担い手たちと寝食を共にするなかでその情熱に共感を寄せるようになっていった<sup>(33)</sup>」。このような姿勢は浪花と石川を通じて、鳳機関にも移植された可能性がある。

機関員は日本人だけで100人近くを擁し、そのほかに現地の華人やアラブ人、「原住民」をエージェントとして使用していた。

#### 活動地への展開<sup>(34)</sup>

機関員募集後、尊皇塾に集結した第1陣の約20名が、1942年1月8日、極洋丸に乗船し、横須賀を出発した。途中、佐世保、高雄、馬公などに寄港しながら、1月20日にフィリピンのダバオに到着した。ダバオでは1ヶ月前の1941年12月20日に日本陸海軍部隊が上陸し、警備中であった。

ダバオには約2週間滞在し、機関員たちはマレー語や無線電信などの習得に努めた。また、

第3艦隊の旗艦である重巡洋艦「足柄」（第3艦隊第16戦隊）において、参謀の小関晟中佐<sup>(35)</sup>に活動についての指示を仰いだ。

第1陣一行はその後、2月10日にオランダ領東インドのアンボンに入港した。日本軍は1月30日にアンボンに侵攻、2月7日頃までに戦闘を終了した直後の状態であった。アンボン攻略した部隊は陸軍が伊東支隊（指揮官 第38歩兵団長伊東武夫少将）、海軍が呉第一特別陸戦隊、第2護衛隊（指揮官 第2水雷戦隊司令官田中頼三少将）であった<sup>(36)</sup>。約1週間のアンボン滞在中は、清国の指揮下で軍事訓練を行い、ティモール侵攻の準備を行った。

2月17日、伊東支隊とともにアンボンを出発し、2月20日に陸海軍のクーバン侵攻部隊と共に上陸した。翌日にはクーバン市内に鳳機関本部を設置し、すぐに地形・民情調査・現地語の習得などの活動を開始した。3月、ティモール島中部派遣隊を編成し、西ティモール中部のソエに進駐した。ソエではインドネシア人教師宅に宿泊し、語学の習得に努めた。

第2陣の約25名は佐藤靖の指揮下、5月に日本を出発し6月にクーバンに到着した。この時に、機関員の身分は海軍嘱託、待遇は奏任・判任<sup>(37)</sup>・無待遇などと判明した。機関長の清国重利が奏任3等、副機関長の山本章甫は奏任5等、ほか主要幹部は奏任6等から8等等であった<sup>(38)</sup>。

その後、鳳機関の本部は1943年5月にクーバンからタロスに移動した。機関員のポルトガ

(31) 山本政義『ビルマ工作と謀略将校』六興出版、1978年、30ページ、ボ・ミンガウン『アウンサン将軍と三十人の志士』田辺寿夫訳編、中央公論社、1990年、14、138ページ。

(32) 防衛庁防衛研修所戦史室『大本営陸軍部・大東亜戦争開戦経緯3』朝雲新聞社、1973年、296ページ。

(33) 斎藤照子「開戦期における対ビルマ工作機関―南機関再考―」田中宏編『日本軍政とアジアの民族運動』アジア経済研究所、1983年、105ページ。

(34) 防衛省防衛研究所図書館史料室（以下、防衛研究所と略）：①／日誌回想／51、石川尚市「錦隊（元鳳隊）回想録」昭和37年10月22日

(35) 海軍兵学校50期。

(36) 防衛庁防衛研修所戦史室『蘭印・ベンガル湾方面海軍進攻作戦』（戦史叢書 第26巻）朝雲新聞社、1969年、224～244ページ。

(37) 奏任は3等から8等の高等官を指し、内閣総理大臣が天皇の裁可を得て任命する形式をとった。奏任3等は少佐、奏任5等は少佐、奏任8等は少尉にそれぞれ相当した（栗屋憲太郎・吉田裕編『国際検察局（IPS）尋問調書 第37巻』日本図書センター、1993年、109～111ページ）。判任は高等官より下級の官吏。

(38) NAA: MP742/1, 336/1/1724, "Interrogation report of Kiyokuni Shigetoshi"

ル領ティモール内の活動地域は、首都ディリのほか、西部のボボナロ Bobonaro、ハトリア Hatolia、中部のアイレウ Aileu、マナトゥット Manatuto、東部のオスー Ossu、ラウテン Lautem、パウカウ Baucau、バギア Baguia など広範な地域にわたった。

### Ⅲ．鳳機関の活動

鳳機関の主な活動は、民情調査、連合軍残兵や蘭印軍関係者の動向把握、住民宣撫、情報収集などであった<sup>(39)</sup>。本部がアンボンへ移駐した後は、①陸軍の憲兵隊や海軍の特別警察隊（特警隊）のための調査、②エージェントのリストアップと供給、③ラジオの盗聴、④治安状況の偵察、⑤アンボンにおける「原住民」向けの諜報学校の組織と運営、⑥情報の照合などを行っていた<sup>(40)</sup>。阿部唯一はオランダ語資料の翻訳を行っていた<sup>(41)</sup>。

#### 日本学校の運営

1942年4月10日、鳳機関はアタンプアで「日本学校」を開校した。石川尚市が「日本学校教育方針」「日本学校開校教科要項」を起草してクーパンの司令部に提出し、「日本学校」の校名と教育方針・教科書・運営など一任するとの承認を得た。華人の設立した中華学校を改装して校舎とし、教科書は謄写印刷したものを配布して使用した。開校して間もない4月29日には「天長節奉祝式典並びに記念運動会」を開催し、在籍学童約100名が参加した。

アタンプアの日本学校を手本として、クーパン（山本ほか本部員）、ソエ（石川が兼任指導、河内）、ニキニキ（窪田・篠原）、カパン（増田、楯）などの各地に、それぞれ機関員2名程を配

置して日本学校を開設した。教員には地元の「原住民」教員を活用した。

これら日本学校の中でも、ニキニキ校は全寮制を採用し、大校舎を新築した。教員宿舎や自活農園、実習農場等を備える大規模なものであった。教課指導面は石川が担当し、設営は窪田・篠原が行なった。「地元酋長以下原住民の絶大なる協力を得」という。教師は10家族で、生徒数は150人ほど<sup>(42)</sup>と、かなり大規模なものであった。

#### アイレウ攪乱工作

アイレウはスーロ県の県庁所在地であり、ディリの南方19km、標高870mの高地に位置する風光明媚な町である。ポルトガル人行政官吏および植民地軍が駐屯していた。兵舎や華人商店、ポルトガル人邸宅などは石造りの建造物であり、住民はティモールで一般的な、竹やヤシなどの材料で建てた小屋に住んでいた。町には中央に泉を配した市場があり、近郊には水田が広がっていた<sup>(43)</sup>。

1942年2月の日本軍侵攻後、ティモール島の警備部隊は9月上旬に第38師団の歩兵第228連隊から第48師団の安部支隊<sup>(44)</sup>に交替していた。第48歩兵団長の安部孝一少将によれば、ティモール島の「蘭領地区においては治安状態概して良好であつたが、葡領においては残存の豪、蘭軍が山間に出没してゲリラ戦を展開し、無警戒に往復する自動貨車が、しばしば襲撃される」状態であり、「これが掃蕩は支隊に課せられた最重要事項であつた<sup>(45)</sup>」。

このような状況の下、9月20日、アイレウに日本軍の部隊が進攻し、駐屯を開始した。労務者（荷物運搬人）に扮した「原住民」の大軍を伴っていた。この部隊の司令官は、ポルトガ

(39) NAA: MP742/1, 336/1/1724, "Interrogation report of Kiyokuni Shigetoshi"

(40) 防衛研究所：①／日誌回想／51、山本編、前掲書、242ページ。

(41) NAA: MP742/1 336/1/1724, "Statement by Abe, Tadaichi."

(42) 防衛研究所：①／日誌回想／51。

(43) Allied Geographical Section, *Portuguese Timor*, Terrain Study No.50, 1943.

(44) 第48歩兵団、歩兵第47連隊基幹。防衛庁防衛研修所戦史室『豪北方面陸軍作戦』（戦史叢書 第23巻）、朝雲新聞社、1969年、47～48ページ。

(45) 南星会『第四十八師団（台湾混成旅団）戦史』再版（初版は1967年）、南星会、1973年、165ページ。

ル植民地軍の司令官コスタ Freire da Costa 大尉に対して、ポルトガル植民地軍による警備は兵舎のみとし、アイレウの町の警備をはじめとした治安維持は日本軍が行うと通達した<sup>(46)</sup>。

10月1日、鳳機関が約300名の「原住民」兵を用いてポルトガル植民地軍兵舎を奇襲した。この攻撃の指揮は佐藤が行い、石川はアンプア側から合流した<sup>(47)</sup>。この時の様子を安部少将は「ほとんど無抵抗な葡軍隊に徹底的打撃を与え、逃亡潜伏するものまで捜し出して剿滅し、その惨状目を掩わしめるものがあつた」と描写し、「この事件は当時われらの全く知らざる間に行われた」として、陸軍部隊の関与を否定している<sup>(48)</sup>。この攻撃でポルトガル人9名<sup>(49)</sup>が殺害された。事件後しばらくして、奥田真輔がアラブ系の「数人の優秀な現地人<sup>(50)</sup>」を連れてアイレウに着任した。

奥田の回想によれば、奥田は他の機関員と共に、ディリ港からアイレウまで夜間に徒歩で移動した。アイレウに到着すると、他の機関員たちはさらに奥地向かい、奥田一人がアイレウでの任務を与えられた。護衛のためにアラブ人が与えられ、「原住民」兵約40名で任務を担った。アイレウには陸軍の1個大隊（大隊長は中佐）が駐留しており、アイレウを中心として、前線のエルメラほか2～3ヶ所の主要地域に、アラブ人従兵および現地召集の現地兵2～30名を引率して、情報収集を行った。ティモール人の調理人を使用し、「原住民」と寝食を共にするなど、地元社会に溶け込もうと努めていた。奥田と同時期にアイレウに駐屯していた歩兵第

47連隊の主計将校は、5人のアラブ人を以下のように回想している<sup>(51)</sup>。

**マハルス（アラブ人）** 歴戦の勇士で背の高い大きな鋭い目の好男子、30才位、土民軍の中隊長。

**アワット（アラブ人）** 華奢な体だが単身で自動小銃一挺もって濠蘭軍の天幕内に潜入して敵を皆殺しにした事のある男、25才位、小隊長。

**ウマール（アラブ人）** 文筆のきくインテリ、22才くらい、小隊長。

**ムスタハ（カラバヒ人）** ゴツゴツした顔で風采は上がらないが人の良い歴戦の勇士、30才位、小隊長。

**コーラン（アロール人）** 鼻下に髭をはやした男、勇士ではなく副官タイプの男である、船大工出身、40才くらい。

ムスタハとコーランは、ティモール島の隣、アロール島の出身であった。アラブ人たちを幹部として起用した理由は、彼らが東ティモールでのマイノリティであること、マレー語が堪能なこと、などが推測される。奥田はアンボンに転出する1943年10月、アラブ人幹部たちを陸軍の各部隊に配転させた。奥田の転出により、アイレウの鳳機関は活動を停止したことになる。

## ハトリア王復辟工作

20世紀初頭、ポルトガル政庁による植民地「平定」戦争が各地で展開されるに伴い、ティモールの諸王国には政庁によって人頭税の強化

(46) Manuel de Abreu Ferreira de Carvalho, *Relatório dos acontecimentos de Timor*, Ministério das Colónias, 1947, p.369.

(47) 防衛研究所：①／日誌回想／51。

(48) 南星会、前掲書、169ページ。

(49) 殺害された9名は、Antonio M. Freire da Costa 大尉と妻 Maria Eugenia F. da Costa、Dinis A. Arriarte Pedroso 医師、Jose J.O. Gouveia Leite スーロ県秘書官、Antonio Afonso 郡長代理、Evaristo Gregorio Madeira 2等軍曹、Julio Antonio da Costa、Alvaro Henriques Mayer、Joao Florindo の各兵士。Carvalho, *op. cit.*, pp.371-376.

(50) 竹林良一『干乾しにやさせない四十七』竹林良一、1988年、207ページ。

(51) 奥田、前掲書；竹林、前掲書、206～207ページ。マハルスは Mahros Alkatiri、アワットは Awad bin Bader al-Katiri Bazher、ウマールは Umar Sagan である。Ambarak A Bazher, *Islam di Timor Timur*, Gema Insani Press, 1995, pp.40-41 および筆者による Salem Sagan 氏からの聞き取り（ディリ、2008年7月19日）。東ティモールのムスリムは主に南イエメンのハドラマウトからの移民とその子孫、アロール島など近隣諸島出身者とその子孫、ティモール「原住民」でムスリムに改宗した者から成る。



と過酷な強制労働が課せられるようになっていた。これら人頭税と強制労働の強化に耐えることが出来ず、エルメラ県ハトリアのディルハティ Diru Hati 王国は、配下の領民や家畜など一切とともに 1911 年末にオランダ領西ティモールのアタンブア近郊に移動した<sup>(52)</sup>。鳳機関はアタンブアでこの王国に接近し、ディルハティ王のナイレト Fransiscus Xavier de Martins Nai Leto<sup>(53)</sup> 一族を擁して、「原住民」兵約 150 名を率いてハトリアを復旧した。これは、陸軍部隊のオーストラリア兵掃討作戦において依頼されたものであった。ナイレトの王子ナイブティ Silvestre Nai Buti はアタンブアで日本軍に協力した<sup>(54)</sup>。

### ティモール人の動員

先述した奥田の例のように、鳳機関員たちは現地社会に溶け込み、日本軍の必要に応じてティモール人を動員できるように宣撫していた。同時に、アタンブアのディルハティのように、日本軍に「好意を有する土民部隊を育成強化」する工作を行っていた<sup>(55)</sup>。

たとえば西ティモールでは、ティモール島を攻略した日本軍部隊の野菜不足を補うため、1942 年 5 月、クーパン近郊のタロスに野菜農園を開いた。この農園では鳳機関の助力で 100 名の囚人を労働に従事させ、野菜を栽培した<sup>(56)</sup>。

一方、東ティモールでは、部隊移動中に川底に横転したトラックを引き上げる援助を鳳機関

員から受けたことを、山砲兵第 48 連隊第 4 大隊第 7 中隊長の今村浩は回想している。今村の部隊は 1942 年 11 月 23 日スラバヤから到着し、ディリに上陸した。3 日後にディリを出発して 2 日間かけてバウカウに到達し、ヴェニラレーからオスーへ雨の中を行軍していた。途中、部隊が丸太の橋を通過した時に橋が崩れ、トラックが横転して川底へ落下した。容易には引き上げできそうにないことから露営を決心していたところ、「黒縁のロイド眼鏡に鼻下に髭を蓄え、原色のサロンを巻き、体軀堂々片手に日本刀を携えた日本人」が現れた。鳳機関員の高橋正四であった。高橋は配下のティモール人に食糧を大量に用意させ、今村の中隊に振舞った。翌朝、高橋は「凡そ二百名は居るとされる土人を指揮し」て転落車輛を引き上げ、今村の部隊は無事オスーに到着することができた<sup>(57)</sup>。

また、第 4 野戦飛行場設定隊はビルマから 1943 年 2 月 6 日ディリに到着し、ディリ飛行場の急速拡張整備を命じられたが、工事は人手不足で難航していた。しかし、鳳機関の手配で義勇兵の協力を受け、飛行場拡張整備を行なうことができた<sup>(58)</sup>。

### 錦隊への改編と「濠北公司」設立

各南遣艦隊は 1943 年後期から 1944 年後期にかけて艦隊自衛のため、各占領地域に対する敵諜者の進入を防御する目的で、一部民間人を含む、主として「原住民」を使用した防諜組織を有した。第 1 南遣艦隊(シンガポール)は潮機関、

(52) F.J. Ormeling, *The Timor Problem: a geographical interpretation of an underdeveloped island*, J.B. Wolters, 1956, p.184.

(53) 1872 年 Ailelo, Hatolia 生まれ、1953 年 11 月 18 日没(於 Tenubot, Atambua)。Diru Hati 王国はポルトガル語の文献では Deribate 王国と表記されている。

(54) Katharine G Davidson, "The Portuguese colonisation of Timor: the final stage, 1850-1912", Ph.D. dissertation, University of Melbourne, 1994, pp.199-200, 258-259; 前田透『チモール記』蒼土舎、1982 年、111～135 ページ; Djose S. Martins Nai Buti, Aloysius Mau Pedor and Marthen Martins, "Upacara Adat Pelantikan Raja Suku Kemak Diru Hati - Rumah Adat Bey Leto Kelurahan Manumutin - Kabupaten Belu" Atambua, NTT, 2006, pp.1-2.

(55) 鳳機関に加えて、陸軍の諜報機関である富機関も同様の活動を行っていた。防衛庁防衛研修所戦史室『臺北方面陸軍作戦』朝雲新聞社、1969 年、65 ページ。

(56) *Timoer-Sjoeho*, No.2, 18 June 1942. Timoer-Sjoeho は在クーパン日本軍軍政部が毎週木曜に発行していた官報。

(57) 蓬萊山吹会『台湾山砲戦記』蓬萊山吹会、1987 年、530～531 ページ。高橋正四は山形県出身で講道館柔道 6 段。

(58) 防衛庁防衛研修所戦史室『ビルマ・蘭印方面第三航空軍の作戦』朝雲新聞社、1972 年、244 ページ。

(59) 花機関に関しては「ブアヤ会誌」を参照。

第2南遣艦隊（スラバヤ）は花機関<sup>(59)</sup>、第3南遣艦隊（マニラ）は響機関、第4南遣艦隊（アンボン）は錦機関と呼称した。このうち、第4南遣艦隊の錦機関は鳳機関から改編されたものである。錦機関（錦隊）への改称は、1943年8月に行われた。これは、石川によれば、司令官である清国の業績が中央・出先の両方で問題にされたため、清国が司令官を解任されたことに関連していた。軍令部より伏見博英大尉が8月18日、空路でアンボンに到着し、善後策を講じた<sup>(60)</sup>。

戦況が悪化する中、錦隊は1945年2月1日、「隊の企画秘匿、諸活動の強化拡充手段、自活体制強化の手段方法として、また、隊の組織化をも狙い、株式会社の外形をとることとし」、濠北公司をアンボンで設立した。組織および隊員の配置は以下の通りであった<sup>(61)</sup>。

本社（隊本部）の組織	氏名
社長	山本 章甫（隊長）
専務取締役兼業務部長	浪花 孟（副長）
常務取締役兼調査部長	石川 尚市 （情報部長）
庶務部長	広瀬 善夫
拓務部長	塩崎 巖
経理部長	越中 勝雄
船長	山口 早一
〃	結城 照夫
〃	野村 政雄
通信長	小関 広吉 （付 佐藤外五名）

その他、支店（派遣隊）をハルマヘラ島、サナナ島、ニューギニア島（コカス）、セラム島

（ワラカ、ブラ）、アルー諸島（ドボ）、ケイ諸島、タニンバル諸島、ブル島、サパルア島、フクリラ、スラバヤなどに展開し、各地に2～3名の隊員を配した。さらに、調査部付属として濠北農場・第一試験場を有した。また、増田順亮はアンボン奉公会に、奥田真輔と前野正は台湾銀行アンボイナ支店に転職した。支店（派遣隊）の所在地から判断して、敗戦前の時期にはオランダ領東インド東部のバンダ海を中心とした地域に機関の活動の中心が移っていたことがわかる。

1945年3月1日には隊本部をカテカテに移動し、石川らは7月25日、アンボンを出てセラム島中部の実地踏査に向かい、隊の籠城・自活適地調査を行った。すでに敗戦の雰囲気濃厚になりつつあったのであろう。セラム島北岸中部のウエンパンティを調査していた8月14日、石川らは「情勢の異常を感じ」本部へ帰任した。8月31日にアンボン本部に到着し、順次出先より引き揚げて来る隊員を統括、残務処理を行った。翌日9月1日、隊員を指揮して残存書類等を処分し、国旗降納焼却式を執り行った。その1週間後には、セラム島のイハに残存隊員全員が移動して自活体制をとった。和歌山県田辺港にて復員できたのは、翌1946年5月30日であった。

## おわりに

以上、民間人で構成されていた海軍系諜報組織の鳳機関について、その設立や組織構成、活動などの一端を明らかにした。

創設者の清国重利の経歴については、特務機関・諜報活動などに関わっていたこともあり、すべてが明らかになったわけではなく、経歴の一

(60) 防衛研究所：①／日誌回想／51、西嶋コレクション Mic27-1、NAA: MP742/1、336/1/1724。清国の問題の詳細は不明だが、第19軍の門松参謀以下情報将校がジャカルタの第16軍参謀部別班で鳳機関が作成した豪州内陸部を調査した報告書を発見、のちに資料が信頼できないことが判明した件があった。この件は、ともに元南機関員の山本政義中尉が鳳機関本部を訪問した際、石川尚市機関員と偶然再会した折に判明した。中野校友会編『陸軍中野学校』中野校友会、1978年、593～594ページ。

(61) 防衛研究所：①／日誌回想／51。

(62) 防衛研究所：①／日誌回想／51、NAA: MP742/1 336/1/1724, "Statement by Abe, Tadaichi.", 中野校友会編、前掲書。

(63) 村辺、前掲書、12～14ページ。

部に判然としない部分が残っている。特に、鳳機関を離任し帰国した1943年3月以降の戦時下の動きが完全に抜け落ちている。今後の課題としたい。鳳機関で直属の部下だった者たちからの戦後の評判があまり芳しくない<sup>(62)</sup>。一方、戦後も内閣調査室に関与していたことや辰巳栄一など情報畑の「大物」からの評価が高い<sup>(63)</sup>という、正反対の印象を与えている。

鳳機関はアジア太平洋地域の情報を担当した軍令部第3部第8課の下に、アジア太平洋戦争開戦前後の1941年12月に清国重利によって設立された。伏見博英大尉の庇護を受けながら、清国が運営していた尊皇塾、ならびに講道館を中心に機関員の任用を進めた。

鳳機関の主な活動は民情調査、連合国軍残兵や蘭印軍関係者の動向把握などの情報収集や住民宣撫工作などであった。また、初期には日本学校も運営し、学校教育を通じて現地社会への浸透も図った。そして、ティモール人を日本軍の占領目的に動員する上で重要な役割を果たした。これは、現地社会に溶け込む努力や的確な情報把握、文化・習慣などの理解が、主要な要因と考えられる。極少数の機関員が大勢のティモール人を動員することが出来たことは、注目に値する。

鳳機関は1943年、その名称を錦隊と改称し、さらに戦争末期には濠北公司と称して、民間企業を装った。名称変更と呼応するように、その活動の中心はティモール島からアンボンなど東部インドネシア一帯へと移っていった。

最後に、鳳機関・錦機関の戦友会であるビンタンチモール会について簡単に触れたい。1954(昭和29)年11月、元機関員たちの親睦と遺族との連絡を図るためにビンタンチモール会が結成された。同会は親睦会や慰霊祭、名簿・記念写真集の発行などの事業を行っていた。ビンタンチモール会の会長には猿丸吉左衛門(1903年－1983年)が就任した。猿丸は同志社大学

出身、初代学生横綱(1922年)、砲丸・ハンマー投げで日本新記録を樹立し、ラグビー選手としても知られる花形選手であった<sup>(64)</sup>。柔道の高段者でもあり、1927年に法学部卒業後、満鉄に勤務、矢満喜商事社長、三光汽船取締役(1934年)を経て、戦後は芦屋市長(1948－1952年)、兵庫県議会議員(1964－1967年)などを歴任した。猿丸自身の鳳機関への関与は不明だが、弟の半田吉広が鳳機関員であった<sup>(65)</sup>ことから、ビンタンチモール会会長の役を引き受けたのかもしれない。猿丸のような地元の名士が鳳機関戦友会の会長役を引き受けていたことも興味深い。

オーストラリアでは、退役軍人や政府から東ティモールに関わるNGOまで、アジア太平洋戦争中にティモール島に駐屯していたオーストラリア軍に対して東ティモール人が示した忠誠・友情・犠牲を強調する傾向が強い<sup>(66)</sup>。しかし、このような歴史認識はあまりにも単純化されたものである<sup>(67)</sup>。東ティモールにおけるアジア太平洋戦争の実態は未だほとんど解明されておらず、事実究明の積み重ねが今後必要とされている。また、今後はティモール人・社会に与えた影響についてさらに考察を進めていきたい。

(64) 西田毅『猿丸吉左衛門』同志社山脈編集委員会編『同志社山脈:113人のプロフィール』晃洋書房、2003年、214～215ページ。

(65) 猿丸買驢『ひなた道』卯辰山文庫、1980年、221～227ページ。『ひなた道』については、猿丸雅子氏からご教示頂きました。ここに記して感謝いたします。

(66) “East Timorese WWII Help Remembered”, *The Age*, 25 April 2009.

(67) Jill Jolliffe, *Cover-up: the inside story of the Balibo Five*, Scribe Publications, 2001.